

「秋田の歩き方入門」履修効果の検証と「あきた地域学」への展開

— 生物資源科学部を例に —

吉澤 結子¹・村田 純¹・津田 渉¹・鈴木 英治¹
露崎 浩¹・高橋 秀晴³・水野 衛²

1. はじめに

「秋田の歩き方入門」は、本学部で教養教育科目の一つとして、平成22年4月に新設され現在まで継続している科目である。新設当時、初年次教育の重要性はすでに認識されており、多くの大学で、基礎学力の不足する学生に対して高校教育の復習、大学の講義進行に困難を感じる学生に対してレポートの書き方あるいはノートのとり方など、リメディアル・導入教育が実施され大きな成果を上げていた。しかし、リメディアル・導入教育だけでは新入生に認められる問題点を解消できないことも理解されるようになっていた。現在、日本社会で求められているのは、「みずから考え探求して提案を出せる人材」すなわち「問題発見・問題解決力を兼ね備えた人材」である。このため、自律的な学修への支援と進路を見据えた学修の動機づけが、初年次教育における次なる目標として位置づけられている。この点で、専門知識と技術の修得やグローバルな視野だけでなく、学生自身が直接見聞できる身近な「地域」のなかに興味や課題を発見し、解決方法を探求して、これを試みるといった行動がとれるための学修が推奨され、地域を考える「地域学」を教育の中に取り込む大学が多く現れるようになった。

18歳から過ごす大学生活4年間は青年から大人に移行していく時期であって、秋田の美しい自然、豊かな農業生産力に育まれた伝統文化、そして穏やかな県民性に囲まれたなかでの学修と経験は、その後の人間性や社会性の基盤となっ

ていくと考えられる。しかしながら、当時3年次生や4年次生と話すなかで、学生として3年間以上暮らした秋田について、知識や経験が非常に貧弱であることに驚かされた。したがって、この4年間で過ごす地域と人に興味を持って接し何を体験し吸収するかが、その後のより広い視野や柔軟なものの見方・考え方を身につける岐路になると考えた。これを受けて「秋田の歩き方入門」を初年次科目として新設することとなった。

2. 「秋田の歩き方入門」の講義概要

本講義はオムニバス形式として実施している。平成24年度の講義スケジュール（講師、タイトル）を〔参考資料1〕に示した。講師には、秋田県の現状と将来をもっとも良く理解している立場におられる秋田県職員の方々を中心に依頼することとした。講義スケジュールとしては、まず本学の総合科学教育研究センターの高橋秀晴教授に、初回として秋田の文芸や伝承を題材とした基調講演を頂いた。引き続き、秋田県職員の方々に秋田県の概要に関する講義をしていただき、続いて本学部学生の関心が高い農林水産業、工鉱業といった実学視点に立った講義を展開して頂いた。さらに、秋田県に対する教養を深めるために、歴史、民俗、美術といった人文社会学的視点での講義を頂いた。また、本学の木材高度加工研究所長（飯島泰男教授、林知行教授）に林業、また客員教授（杉山秀樹教授）に水産業の講義を頂いた。

¹生物資源科学部、²システム科学技術学部、³総合科学教育研究センター

科目名については、秋田県の産業、歴史、文化に加え社会の現状と課題のすべてについて15回1科目で網羅することはできないので、「秋田学」とはしなかった。まずは地域案内の入門編にといった意図から「歩き方入門」の語を配することとした。一方で、県内外の出身者が一堂に会して受講する講義である中で、いずれの学生にも秋田県に対する愛着と興味を深めることで、秋田県でより良く暮らし学んでもらおうという趣旨に加え、主体的に地域と接触することでさらに深く秋田県を知ってほしいという意味も込められている。開講当初の1～2年間は、授業終了直後に独自アンケートによる調査を行っており、その結果は平成23年度の総合科学教育研究センター彙報に報告した¹⁾。本講義は選択科目であるにもかかわらず、全入学生のほぼ半数が受講している。また、本アンケートでは講義に対する感想も求めており、おおむね好評を得ている。

3. COC+およびCOCへの本科目の対応

その後、大学の使命の一つとして地域貢献がさらに重要視されるようになり、文部科学省の「地(知)の拠点整備事業」(大学COC=Center of Community事業)が始まった。この中では、地域に学び地域に還元する教育プログラムを企画して学生と大学が地域と連携して地域の課題に取り組むことが推奨されており、大学教育における「地域学」の重要性がさらに高まっている。

平成27年度、文部科学省の「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」において、秋田大学を申請校、本学及び秋田工業高等専門学校を参加校とする事業計画が採択された。「COC+」事業は、全学的に地域を志向する大学が他の大学や企業等と連携し、学生にとって魅力ある就職先を創出・開拓するとともに、その地域が求める人材を養成するための教育改革の実行等により、地方創生の中心となる「ひと」の地方への集積を図り、若年層の東京一極集中を解消することを目的とするものである。

さらに、この「COC+」事業に加え、本学が申請した「県内大学連携インターンシップ制

度」の構築と地域教育を含む一連の取組が、地方創生の推進につき特に効果的で優れたものとして文部科学省から認められ、新たに「地(知)の拠点大学(COC)」として本学が認定された²⁾。これにより、政府の地方創生政策とも相まって、本学は地域貢献と社会連携の実践をより具体化かつ鮮明化することとなった。これに伴い「秋田の歩き方入門」も地域との連携を深めるために、講義内容の見直しと組直しをはかり、平成29年度から「あきた地域学I・II」の2科目に発展・充実させることになった。具体的には、「あきた地域学I」の必修化に加え、県内自治体の協力による協働型現地研修の実施等による講義目標の高度化を図るべく準備中である。

これを機会に、現行科目「秋田の歩き方入門」を振り返ることは、新設科目「あきた地域学I・II」の授業内容構築のために有為な参考資料になると考えた。平成27年度4年次生にアンケートへの協力を依頼し、その結果を考察することとした。

4. 今回の授業アンケート実施について

今回のアンケートは、現行科目「秋田の歩き方入門」の受講がその後の学生生活や履修にどのように影響したかを調べるために、講義実施直後(1年次生)ではなく4年次生に対して実施した。本アンケートは、回答者個人の考え方や感じ方を調査することを目的とするため、多くの設問において自由記述による回答を求めているのが特徴である。平成27年12月中旬の約1週間に、4年次生全員にアンケート用紙を配布してアンケートへの協力を依頼した。アンケートは、下記設問で構成した。

5. 各学科の回収率等について

本アンケートの学科別回収状況と「秋田の歩き方入門」受講状況（全入学者に対する受講者数）を下表にまとめた。なお、本科目は入学初年次での受講を想定しているが、2年次及び3年次で受講した学生が各1名いた。

入学者に対する本科目受講者の割合が高いのは生産学科の78%、次いでアグリ学科の65%であった。環境学科の受講率が著しく低い原因は、環境学科1年次必修科目と本科目のシラバス内容が類似しているとみなされてしまったためと考えられる。

アンケート回収率については、全体としては当該学年が在籍156名でアンケート回収数が98枚のためアンケート回収率は63%だが、本年度の4年次生が1年次の時の「秋田の歩き方入門」受講生は86名（2年と3年の受講生各1名を省く）だったので、アンケート回答中で受講したという回答が55枚だったことを考えると、当時の受講生の64%から回答が得られていたことになる。

回収期間がほぼ1週間と短かったことから、もう少し長めにとって提出を促せば回収率は向上すると思われる。当初、履修していない学生は回答に消極的あるいは無関心になることが危惧されたが、回答者中の非受講生比率は、応用で50%、生産で35%、環境で83%、アグリで32%であったことから、受講・非受講にかかわらず回答提出されており、回答者個人の考え方や都合によるものと推察される。

学科	アンケート (4年次における)		受講状況 (1年次における)	
	回収数 (人)	内受講者数 (人)	受講者数 (人)	入学者数 (人)
応用	26	13	21	39
生産	26	17	31	40
環境	12	2	5	31
アグリ	34	23	29	46

6. 講義内容や受講した経験の 利用や影響について

1) 他の講義や実習に対して

本設問で問いかけた学修に対する利用や影響

は、生産2名、環境1名、アグリ1名とごく少数にとどまったが、「秋田県の農作物の主要な品種を知ること、授業でのイメージがしやすくなった。」「秋田の稲作をはじめ気候に適した農業を学ぶのに基礎知識として役立ちました。」との回答があった。

生産・環境・アグリでは農作物や農業技術を学ぶ上で直接的な予備知識となっていることが窺える。一方、応用ではその後の講義や実習に影響があったとの回答がゼロであった。他学科にくらべ理学・基礎科学的分野の科目が多いことから、納得できる結果ではある。しかし、応用の卒業生は県内外の食品関連企業へ就職も多いことから、この間の溝を埋める方策も必要ではないかと考えられる。

2) 学生生活に対して

本設問で問いかけた大学生活に対しては、利用や影響があったとの回答が今回の設問中最も多く、応用7名、生産5名、環境2名、アグリ7名であった。その内容は「秋田県に興味を持った」「友人を作るのに役立った」「自分や来訪した友人との観光に役立った」の3つに大別された。このうち、「秋田県に興味を持った」（秋田に親しみがわいた、好きになった、授業後も県立博物館を何度か訪れた、歴史や農業や文化について再考する機会となった、等）が最も多く、55回答中13回答（24%）にのぼった。また、入学直後の第1セメスター科目であったことから、「友人を作るのに役立った」が次に多く7回答、「自分自身や来訪してきた友人案内等への観光に役立った」が4回答あり、それぞれに活用された様子が示されている。

「秋田県に興味を持った」との回答が多かったのは興味深い点である。以前に授業終了時に行ったアンケート調査でも、「県内出身だが県のことをほとんど知らなかったことに気付かされた」「県外出身だが秋田に興味を持った、自分の郷里にどんな課題があるかも調べてみたい」といった回答があり、本科目が身近な地域に目を向けるきっかけとなっていることが明らかとなっている。

「友人を作るのに役立った」のは、学生にとっては非常に重要であろう。1年次の4月からゴー

ルデンウィークにかけての期間に、市内3か所（秋田県立博物館、佐竹資料館と久保田城御隅櫓、秋田市民俗伝承館＝ねぶり流し館）を自分たちだけで公共交通機関等を使って見学してレポートを書く課題は、学生どうし語らいながら行動することで友人をつくるきっかけとして活用されているようである。

3) 就活や進路選択に対して

本設問に対して、進路に対する利用や影響があったとする回答は、応用1名、生産2名と少数にとどまった。しかし「地産地消を心がけて食空間を作らないと、という意識を持った」という重要な回答があった。また、就職活動での面接において「秋田県の農業の強みや弱みを聞かれたとき（役だった）」、「秋田のことを聞かれてなんとなくだが、答えることが出来た」等、直接役立つ例がみられ、本科目により秋田県に対する意識に変化が生じている。

本設問は、本科目の講義目標にもっとも密接に関係するものであり、着実に利用された例があったことは、本科目の重要性を示す証左であろう。自由記述ではなく選択式回答とすることで、受講生の意識を定量的に反映する結果が得られるものと期待される。

就職活動での面接試験において、「秋田はどこなところか」「秋田支社（営業所）に勤務することをどう思うか」「学生時代に頑張ったことは何か」といった質問があったことを報告する学生が多い。学生自身が秋田県に愛着をもっていれば、面接試験において充実した学生生活を送っていることをアピールでき、受験先にも好印象を与えるだろう。また、本学学生の県外企業への就職活動により、秋田県の良い印象を県外に伝える効果も期待される。

5. 本科目を受講しなかった

学生の所感について

「秋田の歩き方入門」を受講しなかった学生に対して、「今考えて、聞いてみたかった話題がありますか?」という質問については、アンケート回答者中で受講しなかった43名のうち、「ある」と「少しある」を合わせると11回答に

のぼった。聞いてみたい内容については、「秋田県の現状と取り組みや施策（地域振興、就農、観光、人口減少、自殺率、子育て支援、地域県民との連携等）」との回答が多く、その他は「歴史、農業、林業、八郎湖、秋田の見どころ・観光地・名物、天然秋田スギ等」の回答があった。卒業論文で秋田県の課題をテーマとした時に、秋田県職員による講義を受講しておけば良かったと思う学生は少なくなかった。また、次の設問での回答だが、地方自治体の公務員試験には、有用と感じた学生も認められた。

6. その他この科目について

思うところについて

55枚の回答のうち、この項目への文章回答が15件あった。

肯定的な回答として、「おもしろい講義だった」「秋田の文化を学ぶ・触れることは良いことだと思います」「秋田の特徴や現状を知る上ではとても役立つと思います、地方公務員を目指す方にも」「1年次に受講し、県外から来た学生にとっては秋田を知る良い機会になるので今後も継続してほしい」「自分の就職が秋田県の農業関連の企業だったため、秋田県の農業についても一度聞きたかった、県職員の方が直接お話して下さったため大変貴重な講義でした」などの回答が、本講義科目の効果や影響を端的に表しているようである。

一方、科目の運営方法については、「講義名だけではイマイチどんな内容の講義なのか判断が付きづらいため、シラバス以外にも簡単なアナウンスなどがあれば参加しやすいのではないか」「1年生の時にこの科目の履修も考えたが、講義内容についてのイメージがつかめず、結局他の科目を履修した、そのため「秋田の歩き方入門」の魅力について特に1年生に対しては分かりやすく伝えてほしい」など科目名と講義内容の関係に関する回答があった。本講義の第1回目では履修登録前のガイダンスを行っているものの、ガイダンス参加に至っていない可能性が示唆されている。

また、「科目で学んだことから具体的な活動（問題意識に基づく）を学生が行えるようサポー

トがあれば主体性のある行動として学習の成果が明確になると思う」という、本科目を足掛かりに地域が抱える課題を題材としてPBL形式での展開を希望する回答もあった。本科目の後継科目として平成29年度より開講予定の「あきた地域学Ⅰ・Ⅱ」では協働型現地研修が講義の大きな柱となるので、この科目を通じて学生の地域へ主体的な関与が期待される。

さらに、「グループディスカッションや発表の場はもっと増やしてほしい」という回答があった。現行「秋田の歩き方入門」の最終講義回でも、「秋田を元気にするプロジェクトを考えて発表する」という課題を設けてグループディスカッションの機会を設けているが、後継科目「あきた地域学Ⅰ・Ⅱ」ではさらに充実する予定である。ただ、「あきた地域学Ⅰ・Ⅱ」では地域訪問により課題の抽出と解決策の検討を行って、地域住民も参加する発表会を予定しているので、学生同士の発表会よりも現実的で具体的な議論が求められる可能性があり、入念な準備と高度な調査に基づく深い議論が要求されるので、受講生にとって負荷の大きい科目となることも予想される。

その他少数だが、「秋田らしいと自分思うところをまわって書くレポートがあるのもっと秋田を知れて楽しいものになるのではないかと感じます（具体的に何を行う講義だったのかよくわからなかった）」「見学の交通手段を大学側で用意していただくと参加しやすい」「（見学に）電車がなしお金もないから1年生の初めころにはきびしかった」「レポートの書き方の具体例があるとやりやすかった」「秋田の現状や課題は分かったが、それが実際今の自分とどう関係しているのかはよくわからなくて、時々授業がつまらないことがあった」「興味すらわかず必要を感じなかった（非受講：筆者注）」等の回答があった。課題抽出能力が不十分でレポート作成に困難を感じる学生や、週末にバスサービスがない寮生へのサポートが今後に残された課題であろう。いずれにしても、自分が居住する地域の課題を、自分自身の課題として身近に感じる意識を育てることが重要であると感じた。

7. 総括

平成24年度入学生（平成27年度4年次生）全員に対して「秋田の歩き方入門」受講・非受講にかかわらずアンケート調査を実施した。受講から3年を経て、卒業後の進路もほぼ決定し、卒業論文研究に専心している段階においてアンケートを実施することで、その後の講義や実習など学修への影響についての回答を得ることができた。また、本科目を受講しなかった学生にもアンケートを実施することで、受講率向上のために参考となる回答も得ることができた。本科目受講者におけるアンケート回収率は64%にのぼった。

本科目が、その後の学修活動に影響したかという設問に対して、影響があったという回答は少なかったが、影響があったと答えた学生は、農作物や農業技術の専門教育を受けるうえでの前提知識として本科目は有効であるとの回答であった。学生生活への影響では、約4分の1が「秋田県に興味を持った」と回答した。また、第1 Semester 配当科目として市内文化施設の見学を必須としていたところ、友人をつくるために役立たせた学生が多く見受けられ、本科目の大きな収穫であった。就職活動や進路選択に影響があったとする学生では、就職活動の面接時等に授業内容を思い出して対応に用いたとの回答であった。

本アンケートは自由記述回答を求める設問が多かったためか、回答数としては多くはないが、明確な意思の下に記述された重要な回答が見受けられた。以上を総括すると、秋田県で過ごす学生生活への適応と秋田県立大学で農業関連分野を学び就職活動を行う上で、現行科目「秋田の歩き方入門」は重要な役割を果たしていると結論できる。

8. 後継科目「あきた地域学Ⅰ・Ⅱ」への展開について

平成27年度に文部科学省採択された本学の「COC+」事業では、「県内大学連携インターンシップ制度」の構築と「地域教育」を含む一連の取組みを二本柱とする構成である。

一方の「県内大学連携インターンシップ制度」の構築は、企業等との連携の下、学生にとり魅力ある就職先を創出・開拓することで、学生が秋田県内に就職先を求めやすくするための企業研究や就労体験から成り立っている。

他方の「地域教育」は、秋田の現状と課題に関する認識を深め、課題解決に向けた方策を地域協働で立案・実行を試みるものである。後継科目「あきた地域学Ⅰ・Ⅱ」はこの根幹をなす科目であり、現行科目「秋田の歩き方入門」の講義目標をより実践的かつ挑戦的に展開することになる。今回のアンケート回答に「科目で学んだことから具体的な活動（問題意識に基づく）を学生が行えるようサポートがあれば主体性のある行動として学習の成果が明確になる」との要望が見受けられた。後継科目「あきた地域学Ⅰ・Ⅱ」では「サポート」が盛り込まれる予定であるが、相反する「主体性」と「サポート」のバランスを如何にとるかが課題である。

また、後継科目「あきた地域学Ⅰ・Ⅱ」の実践的部分を、より多くの学生が受講することが「COC+」事業の趣旨に沿うものであるが、そのためには協力をうける地域の発掘と協力体制の構築が肝要である。いくつかの地域と綿密な打ち合わせを行っており、企画の詳細を詰めている段階にある。

「県内大学連携インターンシップ制度」と「地域教育」はそれぞれ単独で実施するよりも、両者を連携させることで相乗的な展開が期待できるプログラムである。「地域の課題に気づき、解決策を模索し続ける人材」と「そのような人材を雇用することで地域活性化に資することを理念とする企業」が出会うことが本「COC+」事業の完成形であり、地域創生への本質でもある。後継科目「あきた地域学Ⅰ・Ⅱ」は、大学と地域（企業）と学生という価値観の異なる三者が協働を模索する教育プログラムであり、困難も予想されるが、その困難を乗り越えることが大学教育の新たな形として求められていると考えている。

《謝辞》

本稿を完成するにあたり、アンケート回答にご協力を頂いた生物資源科学部の4年次生の皆さんとアンケート配布・回収にご協力を頂いた教員の皆様に感謝申し上げます。また、アンケート回答用紙の整理の労を取って頂いたアグリビジネス学科第13期卒業生加藤茜さんに感謝致します。「秋田の歩き方入門」の運営にご協力頂いた本学事務局教務チームの皆さんと「あきた地域学Ⅰ・Ⅱ」の立案を推進して頂いている本学部の金田吉弘教授、荒樋豊教授、本学事務局教務チームリーダー高橋晃氏に深謝致します。

《参考文献》

- 1) 吉澤結子、津田渉、鈴木英治、村田純、露崎浩、高橋秀晴、「理系学部初年次教育としての「地域学」開講の試みー生物資源科学部「秋田の歩き方入門」開講初年度を終えてー」、秋田県立大学総合科学研究彙報』第12号、2011年3月。
- 2) 秋田県立大学ホームページ、お知らせ（2015年10月27日）

〔参考資料1〕平成24年度「秋田の歩き方入門」シラバス

授業科目名	必修・選択	開講セメスター	単位数	主担当教員名
秋田の歩き方入門	選択	1	2	吉澤 結子
授業の目標	<p>秋田は、古代からの城郭遺構や宗教行事遺跡が発見されるなど、古くからひとが住んで営みを続けてきた地域である。現在も豊かな自然と独特の文化が守られてきており、そこに各種産業や都市機能を発展させようとする人々の暮らし方には学ぶべきものがある。本科目により、大学生活4年間を過ごす秋田の地域特性と地元の人々をよりよく理解し、大学での学業や友人との出会い以外にも、秋田の地域とひとから体験・吸収し、その結果、より広い視野や柔軟なものの考え方を身につける。</p>			
授業の概要・計画	<p>授業概要 本科目は、講義と現地見学で構成し、過去と現在の秋田に関して、地理、歴史、政治、経済、産業、文化などについて学習する。また、関連する文化施設の現地学習では、みずから各種交通手段を利用して秋田を「歩く」ことで、秋田のひとと文化に多くふれる機会を作ることを目指す。</p> <p>授業計画（実施順は変わることがある）</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. ガイダンス（授業の目的、進め方、評価方法、現地見学等説明）【吉澤】 基調講義「秋田の歩き方」【高橋】 2. 秋田県の概要（地理、人口、産業、等）【秋田県総合政策課】 3. 小泉潟の県立博物館見学【現地を各自で学習】 4. 秋田の歴史【県立博物館学芸員】 5. 千秋公園内の文化施設見学【現地を各自で学習】 6. 秋田の地方行政と経済・産業の概要【秋田県総合政策課】 7. 大町の民俗伝承館（ねぶり流し館）見学【現地を各自で学習】 8. 秋田の農業【秋田県農林政策課】 9. 秋田の水産業【杉山秀樹（本学部客員教授）】 10. 秋田の林業【飯島泰男（木材高度加工研究所）】 11. 秋田の鉱業【秋田県資源産業課】 12. 秋田の工業【秋田県地域産業課】 13. 秋田の民俗・芸能・伝統工芸など【県立博物館学芸員】 14. 秋田の美術【県立美術館学芸員】 15. 入門編を終わって【グループワーク】【吉澤】 <p>（講義順は入れ替わることがある） 分担当教員：高橋秀晴</p>			
成績評価の方法	<p>出席3分の2以上を要する。レポート提出状況とグループワーク参加状況で総合的に評価する。</p>			
テキスト・参考書等	<p>各回に資料配布予定。</p>			
履修上の留意点	<p>見学の方法やレポート提出など実際の授業の進め方は、初回のガイダンスで説明する。</p>			
備考	<p>※平成22年度新設科目であるが、平成21年度以前入学者の履修も可とする。</p>			